



新連携・地域資源活用・農工商連携

「桐」と「技」にこだわる老舗工房の新事業展開

独立行政法人 中小企業基盤整備機構

新事業支援部 連携事業支援課 課長代理 山崎 文義

紹介事例の概要

団体名	桐里工房
認定区分	地域資源活用
認定事業名	羊毛桐材を活用した組立ベッド等桐製品の開発及び製造販売
認定日	平成21年6月29日

■「家具の町 大川」の起源は室町時代後期

大川市は、九州最大の河川、筑後川の下流に位置している。大川家具の歴史は古く、その起源は約470年前の室町時代後期まで遡ることができる。明治中期における技術の発展、販路の拡大により全国的に大川は「家具産地の町」として知られるようになり、第二次世界大戦後に国内での需要の高まりにより大川の家具製造は急速な発展をとり、日本一の家具生産地となった。

平成2年には、本地域の出荷額が約1216億円となったが、バブル崩壊後の個人消費の低迷や生活スタイルの変化、また、急速な国際化の進展により、中国製などアジアを主とした安価な輸入家具の攻勢を受け、平成18年では、出荷額が約538億円と往時の半分以下まで落ち込む状況となった。

そのような中、地域の活性化を図るため、安価な輸入家具に負けない技術やデザインに優れた商品を開発し、国内市場だけではなく、海外市場へも視野に入れた販路開拓に取り組む桐里工房を紹介し

たい。

■「桐」と「技術」にこだわり、今も進化する老舗工房

桐里工房は、創業明治45年、今年で100年を迎える。代表の稗田正弘氏は生まれも育ちも大川の三代目の当主であり、福岡県から「現代の名工」として表彰された大川を代表する桐箆笥の職人である。工房の名前から分かるように「桐」という素材に対する、強い思いやこだわりを大切にしている。



稗田代表

■「桐」は「木」と「洞」と書くように実は木じゃなく??

桐はゴマノハグサの落葉広葉樹で、幹の中心が草などと同じように空洞（導管）になっていることから、木ではないと言われる。また、檜や杉と比べると成長が早く、20〜30年で家具の材料となるほどの大木に育つ。「娘が生まれたら、桐を植えなさい。お嫁に行くときには、桐のたんすができるくらい大きく育つ」という言い伝えがあるほどだ。

桐材の特長として、その多孔質の構造

から、「軽さ」や湿度変化に応じて湿気を吸放出する能力による「防湿・保湿効果」、「タンニンやパウロミンといった成分が含まれていることによる「防虫効果」があり、日本の風土に適しているため、古来より日本人の生活の中で愛用されてきた。

■「技」へのこだわり

稗田代表は、「全国の工房を見てきたが、うちの工房ほど手作りにこだわる所は見ることがない」と語る。また、大型機械を導入している量産工場でラインから流れるように製品ができる姿を見た時に、「これでは家具業界は将来だめになってしまう」と感じたという。

これは、木は自然から限りある贈り物と考え、家具作りは一人ひとりの職人が、責任を持って最後まで仕上げる、まるで子供を育てるかのような「一人一品製作」という創業時からの姿勢を大切に継承していることにはかならないからである。

また、「機械に頼りすぎず、手作りで良いものを作っていけば生き残っていくところはたくさんある」とも語る。

職人に対しては、「機械はなるべく使わないで手を使いなさい」と指導する。この反復練習による積み重ねをしないと、技術の継承もできないし、進歩もないと考えているためである。また、手で仕事を覚えた後で、機械を使うと機械のありがたみがわかるという。

工房内にある機械は、40〜50年前から

使用しているものや、基本的な機械しか置いておらず、職人の高い技術に裏打ちされた、手仕事・手作業の昔ながらの丁寧なものづくりへのこだわりがわかる。

また、職人の育成も重要と考え、現在、4名いる職人に対して見習いを1名ずつ付けて高い技術の習得と伝承のための育成をしているほか、海外はドイツからも研修生を受け入れているほどである。

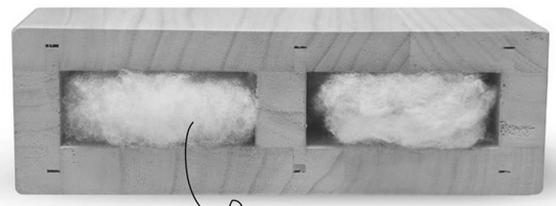
桐里工房で働きたいと希望する声が全国から数多く寄せられており、工房の規模を考えると自ずと限界はあるが、可能な限り受け入れて行きたいとのことである。

■「桐」のよさを知ってほしい「肌」に触れる新商品の開発

桐は箆筒だけではなく、枕や、下駄などより身近なものにも使われてきた。稗田代表は「なぜ枕や下駄に使われてきたのか？」を研究するうちに、桐が人間の健康や身体によいものを出しているということがわかってきたという。これが、桐の持つ、遠赤外線効果や、マイナスイオンを発することによる癒し効果等である。この効果を知ったことから、桐を人間の身体に触れる所に使った方が一層の効果を発揮するのではと思いつき、ベッド等の製造に着手することとなった。

桐が持つさまざまな性質や効果をいかに発揮する商品をめざし改良を進めるうちに、「サーモウル」という羊毛と合成繊維からなる断熱材に着目、研究開発を進めた結果、桐材を中空構造にし

「桐材」で「サーモウル」を包み込むことによって高度な断熱効果や、調湿効果を得ることが出来ます。



「サーモウル」(特許取得済)
良質な羊毛が85%、特殊な合成繊維が15%という割合でそこに熱と空気と少量の水を加え、三次元に組み込んでいます。繊維を立体的にからませる事で、吸放湿の効果を発揮させます。

「羊毛桐材」の構造

てサーモウルを入れ込む「羊毛桐材」の開発に至った。この羊毛桐材には桐とサーモウルの相乗効果により、高い断熱効果や、結露防止、遠赤外線の効果増大、防虫・防ダニといった効果があり、「羊毛桐材を活用した組立ベッド等桐製品の開発及び製造販売」として、平成21年6月に、地域産業資源活用事業計画の認定を受けることとなった。

このベッドを実際に使ったお客様からは、「夏は涼しく、冬暖かい」、「腰の痛みが和らぐ」、「不眠症が治った」等の声をいただいているとのことだ。

また、お客様の中には、健康や身体管理に、人一倍気を使うスポーツ選手もおり、現在アメリカで活躍中の、某日本人メジャーリーガーもこの羊毛桐材ベッドを愛用しているとのことである。

■首都圏さらには、海外への販路開拓

認定に向けての事業計画のブラッシュアップ段階から、認定後の事業化へのフォローアップ支援については、中小機構の篠田プロジェクトマネージャーと、福岡県中小企業団体中央会が連携し、事業進捗を踏まえた課題解決のサポートを実施している。

認定後は販路開拓に向けて、補助金等を活用して東京で開催される展示会や、大手百貨店の催事等へ出展して首都圏への販路の開拓に取り組んでいる。中小機構が認定事業者に対して出展の支援に取り組んでいるIFFT/インテリアライフスタイル リビングの出展がきっかけとなり、テレビや雑誌等メディアにも取り上げられたことにより、売上げも順調に推移してきた。

海外市場へは特にヨーロッパや中東の富裕層をターゲットとした展開をめざしている。東京の百貨店への出展時に出会った海外バイヤーの目にとまり、商品に惚れ込んだバイヤーが中東のドバイで紹介をし、引き合いがきているとのことである。

■「いたがひ」の事業展開が広がる

新たな需要開拓を行うための商品拡充についても余念がない。好評価を受けているベッドについても、デザイナーを活用してよりモダンなデザインの商品を用いた他の商品開発として、椅子や桐

の「畳」と言った新商品展開も行っている。

現在は桐を家具として使用するだけではなく、北海道(昔は、桐の北限は青森だったが、現在は北海道でも生育すること)から鹿児島にかけての植林事業にも積極的に取り組んでいる。

「桐は、生育が早く伐採してもそこから新たな芽が出て、また大木に育つ。3回は大きく成長するとも言われている」

森林伐採による環境破壊に警鐘が鳴らされている昨今、環境破壊に無縁で、自然環境に優しく、人間にも優しい桐のよさを「家具」という形で九州・大川の地から国内外を問わず広めて行きたいと稗田代表は夢を語る。

そんな「桐」にこだわり、「技」こだわる、桐里工房のさらなる飛躍を期待したい。



デザイナーのデザインによる羊毛桐材ベッド